

佐藤哲英著

叡山浄土教の研究

白土わか

佐藤哲英博士著『叡山浄土教の研究』は、博士が昭和三十四年に出された名著『天台大師の研究』に続く、博士の第二のライフワークであって、博士の叡山浄土教に対する識見をあますところなく示された文字通り的大著である。さきの『天台大師の研究』といい、今回の『叡山浄土教の研究』といい、これらの大著を生むに至った学問的情熱の発端は、『叡山浄土教の研究』の序や総結によると、親鸞聖人への思慕の情から出発したものであり、とりわけ親鸞は青少年時代の二十年を比叡山で過ごし、その間に何を学び何を修めたかを解明したいというのが初一念であって、そこから天台大師の研究、叡山浄土教の研究へと導かれていったということである。そこには博士の宗教的純粹さをまざまざとよみとることができるのであるが、同時に、竜谷大学がもっていた学問的伝統が背景にあったように思われるのである。即ち、日下大癡・禿氏祐祥・佐々木憲徳等の諸師による中国天台や日本天台の研究、また書誌学等の伝統が、佐

藤博士の上に開眼し華ひらいたのであったと見てもよいのではなからうか。

また『叡山浄土教の研究』は、佐藤博士の喜寿を記念して、門下生の方々の協力によって出版のはじに至ったということであるが、博士の学風はこれら門弟の諸学者によって、つつがなく受け継がれているようである。

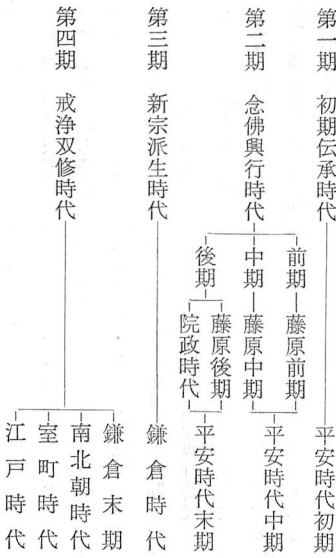
『叡山浄土教の研究』は、大別して研究編と資料篇との二部より成っているが、序四頁・目次一〇頁・本文第一部研究篇七〇四頁・第二部資料篇五二五頁・索引五一頁、計一二九四頁の大冊である。

第一部研究篇はこれを九章に分ち、日本浄土教の始源から江戸中期の安楽派の即念佛の問題にまで至り、その間、叡山浄土教の重要な問題を取りあげて纏説し、叡山浄土教展開史として、秀れた研究と講義の内容を呈している。それは辭書の如き感を与えるほど周到に限なく説述されたものであり、その中とくに、源信時代前後の新資料の発掘と論述とは庄巻である。新資料の発掘は、源信時代の前後には文献的にみるとき、二つのデータエージがあって、その解明が為されねばならぬということから、叡山周辺の古刹や金沢文庫等に於て長年にわたって調査が続けられたとのことである。本書はこれらの資料を集大成しての成果である。

本書の内容について逐次その概略を記してみると、第一章序

説では、叡山を中心に展開した佛教文化を総称して「叡山文化」とよび、その主流としては、法華文化と密教文化と浄土教文化とがあるが、浄土教を叡山文化の主流のひとつとして位置づけた関係上、とくに「叡山浄土教」という學術用語を用いたことをこわわっている。

次に日本浄土教の始源として聖徳太子と浄土の問題から、南都浄土教、密教浄土教に及び、続いて叡山浄土教の問題に入っているが、その前に、日本天台史の時代区分そのものが、厳密な意味で未だ為されていないとし、その区分を立教開宗・台密興隆・念佛興行・口伝流行・四明学盛況の五期に分かつて論じている。叡山浄土教の時代区分としては



の四期に分けている。

第二章では、第一期初期伝承時代について説述し、最澄の止

観念佛の伝承、円仁の五台山念佛伝承、それから空也が出現するまでの叡山念佛展開の様相を論じている。

第三章は念佛興行時代（前期）について、円仁・円珍時代から始まり安然に至って大成した台密興隆に対して、天台正統教学復興のきざしがあらわれ始めた頃には浄土教もまた勃興してきたとしている。そして叡山に於ては法華三昧と常行三昧とが成佛の為の実践道として併修されていたが、空也が念佛弘通を始めたのを念佛興行時代の始めとしている。そして良源・千観から源信に至って浄土教は大成されてゆく経緯に及んでいる。

まず空也については、天台止観の流れをくんだ観念佛を、直截簡明な口称念佛として民衆に手わたしたところに空也念佛の特色があるとし、空也以後の叡山浄土教が観念佛であるに比し、山を下りて都鄙に行なわれた里の念佛は空也の流れをくむ称名念佛であると述べている。ここで称名念佛の問題があらわれてくるが、これは称名念佛の前後の流れを考える上で、問題を提示しているように思われるが如何であらうか。

空也が庶民に念佛を弘通したのに対して、比叡山上に念佛の華を開かせる動因となったのは良源であるとしているが、良源の浄土教については御遺告や論義成佛思想にもふれている。またその『九品往生義』は、『天台観経疏』を指南として弥陀念佛の信仰を天台教義上から位置づけようとするものであったが、しかしまだその主張は明確でなく、両者の融合にも乏しいものがありそれらの点は門人源信によってうけつがれ、天台観心の極要は弥陀念佛にあるとの叡山浄土教の理論体系の確立となっ

たとしてゐる。

また、『天台観経疏』への関心の素地は、叡山の初期伝承時代にすでにできあがっていたが、良源における『天台観経疏』重視の着眼は、趙宋天台の学者よりも一步先んじていたといふべく、趙宋天台の影響がわが国に及ぼしたものとみるべきではないであらうと述べているが、これも示唆にとむ見解である。

良源と同時代の千観については、『弥陀和讃』・『八制』の他にもとくに『十願発心記』をとりあげ、これが念佛興行時代のトップをきった浄土教文献として、良源の『九品往生義』にまさるとも劣らぬ貴重な資料であると評価している。そして、源信や良源の浄土教思想との関連についても考察さるべきものと提示している。

次に禅瑜について、禅瑜はその事蹟もほとんど知られなかった浄土教徒であるが、その『阿弥陀新十疑』は源信の『往生要集』以前の文献として注目すべきものであることを提言している。この書はもと天台の『十疑論』に型どったものであるが、当代における浄土教の諸疑難をとりあげているので、その頃の浄土教徒がいかなる問題に関心を示していたかをうかがわせる資料であるといっている。また禅瑜の浄土教は『観無量寿経』中心の信仰であつて、『新十疑』には善導教義の影響はどこにも見られないが、その十念釈には善導のそれと揆を一にするものがある、良源の立場から一步進んで、『往生要集』の念佛へとつながるものをもっているといふべきではなからうかといわれ、叡山浄土教の系譜にまたひとつの示唆を示している。

慶保胤の『十六相讃』は、『往生要集』の末尾に付してある宋への書状の中にその名が見えているものであるが、早く散佚して流伝を絶っていたものであつた。佐藤博士は、坂本真如蔵から十二世初頭筆写の古筆本を発見されたが、本書にはこれを掲載して紹介、さらに『十六相讃』の問題を日宋天台の交流の面から論じて、現存する『観経』の『十六観讃』中、中国の七種と保胤の『十六相讃』とを対比している。また『十六相讃』に流れている願生浄土の信仰は『観経』の九品往生であつて、良源・千観と共通面をもっていることを指摘している。

次に博士が昭和十一年に青蓮院吉水蔵より発見された『西方懺悔法』について紹介している。この書は『長西録』に円仁作として見えてはいるものの流伝を絶っていたが、平安中期の古写本（一〇五二写）を発見されたものである。本書はくわしくは『修行念佛三昧七月道場明懺悔方法』というが、阿弥陀佛を本尊とし七ヶ月の念佛三昧を修して己が罪障を懺悔する行法である。その懺悔の方軌は天台の『法華三昧懺儀』によりつつも、弥陀中心の懺悔法に改編したものであつて、善導の念佛思想を導入している点で源信の『往生要集』と共通する立場をとり、叡山浄土教展開史上、極めて重要な意義をもつ文献であると述べている。この書の成立年代については、前述のように円仁作とされてきたものであるが、実は『往生要集』とほとんど同時かあるいは多少先行するものと佐藤博士はみなし、ひとり『往生要集』のみが善導教学を受け入れて、正修念佛の行法を体系づけたとする従来の考え方を改めるべきであると指摘して

いる。

第四章「念佛興行時代(中期)」の項は、叡山浄土教大成の時期を扱い、源信・覚運・静照・覚超らの浄土教にふれているが、その中の中心的存在を源信に定めている。そして源信の学問的分野は広汎にわたり深遠であるが、その思想の根底には阿弥陀佛の信仰が流れているとしている。また源信の浄土教関係の著作は二十余部あるが、その中心をなすものは壮年期の『往生要集』と老年期の『観心略要集』であるとし、前者は善導浄土教の影響を強く受けて往生極楽の道を念佛一門に明らかにし、後者は『摩訶止観』によって天台の観心そのまま念佛であるとし、天台の実践法の帰結を念佛に納めている。そして、『観心略要集』の思想の萌芽はすでに『往生要集』に明らかにみとめられると述べている。また、現在、一部の学者の中にも『観心略要集』の思想の問題は、源信の思想体系そのものについて考えるとき、『観心略要集』をもって源信の真撰とみることが、他の論著と比較して些かの矛盾もなく、むしろ源信の浄土学の体系に、『往生要集』と『観心略要集』とをどのように位置づけて考えるかということに本書の論述の中心を置いていと述べている。

つぎに覚運については、『観心念佛』・『一実菩提偈』・『念佛宝号』等の覚運作とされる著作を、何れも真撰と積極的に立証する論拠は乏しく、その真偽については後日の研究にまたねばならぬであろうといっている。ただし、『念佛宝号』の念佛偈の教句が、親鸞の『二尊大悲本懐』のうちに「檀那院覚運和尚

の曰く」として引用されていることに注目をはらっている。

静照については、その『極楽遊意』や『四十八願釈』の問題をとりあげている。また『長西録』に静照撰として出されている『往生十念』は散佚したものと考えられていたものであるが、佐藤博士は金沢文庫で同名の鎌倉中期書写本を発見された。ただしそれは「源信撰」となっているが、その内容からして源信撰とは思われず、これを静照撰とみてよいのではなからうかと論じている。

覚超については、佐藤博士門下の喜多義英氏が「覚超の修善講式とその浄土教」という論題のもとに執筆され、覚超自筆の『修善講式』について報告している。

第五章「念佛興行時代(後期の一)」に於ては、源信によって組織と体系とが与えられた叡山浄土教であったが、その影響は叡山のみならず南都浄土教にも密教浄土教にも及んだことを論じている。とりわけ叡山において源信以後の浄土教に寄与した人々は、ほとんどすべてが源信の流れをくむが、これらの人々を「恵心学派の浄土教」と名づけ、そこに展開する時代を念佛興行時代の後期としている。

しかし、源信より法然に出るまでには、研究をすすめる上で第二のダークエージがあって、その解明の為に、叡山周辺の古刹における古文獻調査発掘にとめたこと、しかし予期した成果はなかなかあがらず、今まで源信の著作として『恵心僧都全集』に収録されてきたいくつかの文獻について、その分析と思想的位置づけを行なう必要を考えたと述べている。

その第一の新出資料の発掘の成果は、青蓮院吉水藏から『浄土嚴飾抄』と『本誓願要集』、金沢文庫からは『菩提要集』であるが、また西教寺正教藏には、源隆国の『安養集』十巻があることも戸松氏らの紹介によって知られてきたことにふれている。

その中、『浄土嚴飾抄』は、鎌倉末期書写本で、叡山浄土教論義の論草書として特異のものであるが、東大寺図書館藏平安末期の写本『安養抄』と関連ふかく、また源隆国の『安養集』とも対比研究さるべきものとされ、その何れも『往生要集』に源をもつものであると述べておられる。『本誓願要集』(一一〇八撰)は、平安末期の人々の信仰の実態をうかがわせるものであるが、源信より法然への思想的移行を跡づけるのはむづかしく文献的にも乏しい中であって、本書は貴重な存在であると評価している。

次に、『長西録』が提供する資料に注目すべきものが多いことをあげ、その中、勝範の『西方集』・『相好集』・『相好文字鈔』についてふれ、『西方集』は散佚して知られないが、あとの二書は大原如来藏に古写本があることを指摘している。続いて『往生要集』の諸註釈をあげ、平基親の『往生要集外異鈔』(鎌倉中期書写本)を紹介している。

次に第二の方法として『恵心僧都全集』に取められる恵心作とされてきたものに焦点をあてている。源信後の浄土教には、『往生要集』の流れと『観心略要集』の流れの二つがあるとしているが、その前者に於ては、『往生要集』から直ちに法然浄

土教に結びつけてしまう従来の考え方に對して、之を文獻的に跡づけるべく努力を払われ、『観心略要集』の流れに於ては、『妙行心要集』・『自行念佛問答』・『決定往生緣起』・『菩提要集』・『勸心往生論』等を取りあげてこれを論じている。『妙行心要集』については、『観心略要集』を受けながらも思想的前進がうかがわれるものであり、その作者を恵快と推定し、十一世紀末の作としている。恵心学派の浄土教派真源については、『四十八願釈』・『順次講式』・『自行念佛問答』をその著作としてとりあげている。『決定往生緣起』については、その十界念佛の思想を宋の遵式の『円頓観心十法界図』と良忍の融通念佛思想との関連に於て論じている。

次に金沢文庫から発見された『菩提要集』と『往生十念』について、これらは『真如観』や『菩提集』と同じく平易に真如思想の要旨を語った和文であって、成立年代は明らかでないが十二世紀初頭に伝写されたものと推定し、これらに一貫する真如思想や本覚思想は、ともに源信の『観心略要集』を受けつつも、更にこれらの思想が高潮された院政期に述作されたものであろうとされている。

次に同じく源信以後の浄土教について、「忍空の勸心往生論」と題して、佐藤博士門下の福原隆善氏が、つづいて「中古天台文献と念佛思想」について花野光昭氏が執筆されている。何れも佐藤博士の学風をつぐ堅実な論証である。

第六章「念佛興行時代(後期の二)」においては、まず「良忍と融通念佛」の問題を、横田兼章氏が「大原如来藏の良忍手扱本

や書写本を紹介しながら論じ、次に源信の影響が南都浄土教学に及ぼしたあとを、永観の『往生捨因』・『往生講式』、珍海の『決定往生集』・『安養知足相对抄』・『菩提心集』を中心に考察を加えている。密教浄土教に及ぼした影響については、仁和寺清暹・実範・覚鑿の著作によって論じている。

更に「朝鮮浄土教の叡山浄土教に及ぼせる影響」と題して源弘之氏が執筆され、良源の『九品往生義』をはじめとする叡山浄土教に対する朝鮮浄土教の影響の見逃せぬ事を指摘している。

第七章「新宗派時代」では、鎌倉佛教と叡山浄土教との関係に及び「青蓮院慈円と浄土教」についてもふれている。「法然と浄土教」については福原隆善氏が執筆され、叡山浄土教思想史の流れの上で法然を位置づけることにとめられている。次に法然門下の隆寛と浄土教との関係に及び、更に「澄憲・聖覚の浄土教」について武覚超氏が、「証空の浄土教」については嶋本弘英氏が執筆されている。

次に「叡山浄土教と親鸞」の問題に入っている。恵信尼文書、叡山常行堂と常行三昧、三願転入、源信の浄土教と親鸞、久遠実成阿弥陀佛、信徴上人御釈について、等にわたって説述している。更に「日蓮と浄土教」については「旃陀羅思想によせて」と副題して仲尾俊博氏が書いておられる。

第八章「戒律双修時代」においては、まず「法然の戒観と興円の円戒復興」について西村岡紹氏が執筆され、次に「真盛の持戒念佛」について考察が加えられ、「妙立・靈空の安楽律と即心念佛」について小寺文顕氏が執筆されている。何れも当を

得た執筆陣であることはいうまでもないが、法然以後の叡山黒谷における興円恵鎮の戒浄双修、盧山寺仁空の戒浄双修、西教寺真盛の持戒念佛、安楽律院妙立・靈空の四分律と即心念佛のごとき、持戒と念佛の双修思想をとくに打出したのは、叡山浄土教史の時代区分に「戒浄双修時代」を立てた所以であるが、示唆にとむ問題であるといふべきであろう。

第九章は総結になっている。

二

第二部は資料篇となっている。佐藤博士が叡山浄土教研究の為には欠かせぬ条件として、古文献の発掘と調査に精魂を傾けられたことは前述の通りであるが、本篇に於ては、それらの資料の中から十二部を選んで収録掲載している。これらの資料については、まず資料の全文写真掲げ、更に利用者の便を考慮して延書を添えて、解説を付したものである。延書・解説は博士門下の方々の手に成っている。掲載資料を列挙すると

(一) 西方懺悔法

(作者) 未詳(長西録には円仁作とする)

(年代) 八三五―九八五

(底本) 青蓮院藏本、永承六年(一〇五二)写

(二) 十六相讚

(作者) 慶保胤(一一〇二)

(年代) 未詳

(底本) 叡山文庫真如藏本、永久四年(一一一六)以前写

(三) 極楽遊意

(作者) 静照 (一一〇〇三)

(年代) 寛和元年—正暦元年 (九八五—九九〇)

(底本) 東大寺図書館蔵本 (一一三五写)

(四) 順次往生講式

(作者) 真源

(年代) 永久二年 (一一一四) 以前

(底本) 知恩院本、文治二年 (一一八六) 六月二日写

(五) 十願発心記

(作者) 千観 (九一八—九八三)

(年代) 応和二年 (九六二)

(底本) 叡山文庫本 (江戸時代写本)

(六) 阿弥陀新十疑

(作者) 禅瑜

(年代) 往生要集 (九八五) 以前

(底本) 正教蔵本、明暦三年写、保延四年 (一一三八) の

奥書あり

(校合本) 真福寺本・生源寺本・無動寺本・京都大学本

(七) 往生要集外典抄

(作者) 平基親 (一一五一—)

(年代) 基親出家 (一一〇六) 後か

(底本) 名古屋真福寺本、文暦二年 (一一三五) 写

(八) 菩提要集

(作者) 伝源信

(年代) 十一世紀末か

(底本) 金沢文庫蔵本、文永七年 (一一七〇) 写

(九) 往生十念

(作者) 未詳 (撰号は源信とあり)

(年代) 未詳 (九八五—一一〇五)

(底本) 金沢文庫蔵本、文永七年写

(十) 念佛五悔講式

(作者) 尊道法親王 (一三三二—一四〇三)

(年代) 貞治元年 (一一三六二)

(底本) 西本願寺蔵本、尊道筆

(十一) 西方懺法

(作者) 未詳

(年代) 天正二年 (一五七四) 以前

(底本) 曼殊院蔵本、室町時代写

(十二) 浄土嚴飾抄

(作者) 未詳

(年代) 一一〇〇年前後

(底本) 青蓮院蔵本、弘安二年 (一一七九) 頃写

『叡山浄土教の研究』は佐藤博士が半世紀をかけられた大著であって、その全貌を紹介することは容易なことではない。限られた時間と紙数とによつては、ごくその一部をかいま見たに過ぎないままに了った。博士の布かれた路線と学問的方法とは

後学者の指針であることに間違いはない。わたくしどもはその路線に学びつつ考究を進めるとともに、博士のいわれたダイクエージを日本佛教の各所に見出して、その解明に努めるべきであらう。博士に学んで資料の発掘と思想的考察とを。また最後に、『観心略要集』真偽の問題はなお時間をかけて論議さるべきものであらうし、佐藤博士の学問の出発点であった親鸞が叡

山から何を学んだかについては、日本天台の問題として今後課題を残しているようである。また叡山浄土教が日本文化の上に残した跡についても、後学者にとって宿題はきわめて大きいといわねばならない。改めて佐藤博士の学恩に謝し、いよいよの御長寿を念じあげる次第である。

(昭和五十四年三月、百華苑刊、A5判二二九四頁一三、〇〇〇円)